

NEWS LETTER

京大農薬ゼミ 2013

Volume 25

NewsLetter 第 25 号 目次

はじめに

仲田芳樹という百姓に学んだ日々 石田 紀郎

農業ゼミの 2013 年

前期ゼミの報告 但馬 和浩
夏の病害虫調査 青木 陽輔
仲田尚志さんインタビュー 日高 渉

追悼仲田芳樹さん

仲田芳樹さんの紹介 大池 智士
省農業ミカン園のきっかけとなった農業裁判 石田 紀郎
仲田芳樹さんの志を引き継ごう 可知 祐一郎
ミカン園に通い詰めていた頃：仲田さんとの思い出 市岡 孝朗
剪定の思い出 中川 ニリ子
原点に仲田芳樹さんあり 森田 亜貴
笑顔 太田 健
芳樹さんの姿 岩本 啓己
別れ 和泉 賀津子

今年の防除暦

3月と6月の計2回散布しました

・3月上旬：マシン油

マシン油には、越冬するカイガラムシとその卵を油の膜で覆い、窒息させる効果があります。物理的に窒息させるので、マシン油は毒物、劇物に指定されておらず、有機農業でも用いることのできる農薬です。

・6月上旬：殺虫剤(スプラサイド)と殺菌剤(ストロピー)を散布

「スプラサイド」は幅広い生育段階のカイガラムシに対して効果があります。

「ストロピー」はソウカ病、黒点病などに効果があります。

表紙絵：内倉 里沙（京大美術部3回）

なかよしき
仲田芳樹という百姓に
学んだ日々

石田 紀郎

1970年の何月かは忘れたが、私は和歌山県海草郡下津町大塗の一人の百姓に手紙を書いた。その人は松本武さんで、息子の悟さんを農薬中毒で失い、その死をめぐって農薬会社と国を訴えた裁判の原告であった。農薬と農業を考え始めていた私は、軽い気持ちで裁判を傍聴させていただきたいと手紙を送り、松本さんから快諾を得て和歌山地方裁判所の法廷に通うことになった。裁判は大阪高裁に移り、1986年に会社と和解して終結した。この間の経過は割愛するが、松本さんの実弟である仲田芳樹さんとはその法廷で知り合い、爾来40年もの長きにわたって付き合っていた。そして、今年の8月23日に仲田さんは他界された。

毎回の裁判に仲田さんは傍聴にお見えになっていたが、いつも静かに松本さんを支える存在であった。裁判があれば、その日の夜などに大塗の集会所で裁判報告会を開き、村の人々と裁判のことや農業／農薬の問題などを話し合った。最初は僅かな人數しか集まらなかったが、和歌山地方裁判所の判決が出る頃には報告会は村人で賑わった。そんな席でも仲田さんは静かに集まりを支えてくださって

いたが、新たに造られたミカン園で農薬を使わない栽培をしてみたいと決心され、私にも手伝えと誘っていただいた。ミカン栽培の知識などない私には荷の重いことであったが、栽培は仲田さんがやり、私とその仲間（農業ゼミ）は病虫害や収量を調査し、記録することにした。1000本ほどのミカン樹が植えられた新しい園での栽培は困難の連続であったが、次第に立派なミカン園（省農業園）となった。昨年から園の主は仲田芳樹さんから息子の仲田尚志さんに引き継がれたが、農薬を可能な限り省いた栽培をめざした芳樹さんの意思はさらに深められて続いている。

日本の農薬の歴史の中でこの裁判が果たした役割は大きく、仲田さんの甥の死と裁判をきっかけとして始まった省農業ミカン栽培という新しい農業の成果は多くの人々に農薬問題を考えるきっかけを作ってくれた。声高に叫ぶわけでもなく、一枚のミカン園から農薬問題を発信し続けた百姓の存在の重厚さを感じる。もつともその恩恵を受けたのは私や35年間に亘ってこの園に通った農業ゼミだろう。いつも静かに、控えめな所作でいろんなことを教えてくださった仲田さんに感謝している。仲田さんは自分たちのことを百姓と称し、「あがら百姓は・・・」と話してくれたから、ここでも百姓と記し、冥福をお祈りする。

（いしだのりお・市民環境研究所代表）

農薬ゼミの2013年

- 4月 講演会
- 5月 花見ツアー（省農薬ミカン園）
勉強会・講演会
- 6月 勉強会
- 7月 勉強会
夏の病害虫調査
- 10月 勉強会・講演会
- 11月 秋の病害虫・収量調査
ミカン収穫手伝い

2013年 前期ゼミの報告

但馬 和浩

農薬ゼミでは毎週金曜日の夜にゼミ活動を行っています。今年度前期のゼミでは講演会と勉強会の開催に注力しました。講演会は恒例の石田紀郎先生の他に、松久寛先生をお招きし、ご講演していただきました。石田先生には「フィールドワークのすすめ」というテーマでお話をいただきました。石田先生は京都からカザフまで様々な農業・環境フィールドに足を運んで調査を行い、今もそれを継続されています。その徹底した現場主義の理念と豊富な経験のエッセンスが教授される機会ということで、ゼミ員の他にも、フィールドワークに関心のある学生が学部・学科の垣根を越えて集い、みな熱心に耳を傾けていました。そして、松久寛先生にはこれから少子高齢化、資源不足に備えて（特にエネルギーの）消費と生産をともに小規模なものへとシフトしていく縮小社会の概念とその必要性についてご講演していただきました。特に、農業部門における縮小社会システムの概念は、省農薬ミカン栽培の現代的意義に通じるものがあり、農薬ゼミの活動理念について再度理解を深め直す良い機会となりました。ご講演後は、先生と学生で食卓を囲みながらざっくばらんに話し合い、松久先生のパーソナリティも垣間見

ることが出来ました。

また、勉強会では7月に「講義では教えてくれない環境問題のそんとコロ」（どこかで聞いたことのあるようなタイトルですね…。）という統一テーマを掲げ、ゼミ員が毎週リレー形式でプレゼンテーションを行いました。岩本は安全な水や食料の供給に必要不可欠な土壤にまつわる危機について発表されました。土壤危機は重要であるにも関わらずなかなかスポットの当たりにくい問題ですが、そうした問題に警鐘を鳴らしていくこそ農薬ゼミの重要な役割の一つだと思います。一方、日高のプレゼンは農薬の安全性を今一度問い合わせる内容でした。農薬ゼミの原点ともいえるテーマで、石田先生をはじめゼミ員みんなが熱いディスカッションを繰り広げました。私、但馬は、アメリカで行われている環境バンクシステムの日本における導入の可能性についてプレゼンしました。この日はゼミ内外の学生からいくつか鋭い質問もいただき、個人的に本当に勉強になった一日でした。以上のように、7月は環境問題という大きなテーマに関して、様々な観点から考察を加え、活発な議論をすることが出来たと思います。これを基にして、来期以降はさらに体系的な勉強会運営を行いたいと考えています。

（たじまかずひろ・京大経済学部4回）

夏の病害虫調査

青木 陽輔

去年の秋調査と今年の夏調査の簡単な報告です。

病害虫の定期調査

去年の10月と今年の7月に病害虫調査を行いました。対象は調査園の木（約400本）のうちの53本です。去年から今年にかけての特徴は主に次の3点です。

①ヤノネカイガラムシは平年並み

ヤノネカイガラムシの発生は去年よりも少し少なくなりましたが、ほとんど変化はなく平年並みの発生といえます。

②イセリアカイガラムシの発生がさらに減少

昨年イセリアカイガラムシの発生が減少了ことを報告しましたが、今年はさらに発生が少なくなりました。3年間の夏調査でイセリアカイガラムシの発生が確認された木の本数は、10本→5本→2本と減少しています。

③ミカンヒメコナカイガラムシは見つからず

去年6本の木でミカンヒメコナカイガラムシが確認されましたが、昨年の秋調査と今年の夏調査のいずれにおいても発生が確認された木はありませんでした。

植物の香りによる害虫防除効果の調査

今年は京都大学白眉センターの塩尻おり先生と一緒に省農薬ミカン園をフィールドとして実験を行っています。

塩尻先生は、害虫によって食害を受けた植物が放出する匂いが隣接する、まだ食害を受けていない植物の防衛反応を引き起こす現象について研究されています。すでに稲・大豆で実験されており、圃場周囲に生えている雑草を刈り取り、それを通気性の良い袋に入れて作物の近くに吊るす処理を行うと、処理を行ったものと行わなかったものの間で収量などに有意な差が出たという結果が得られています。

今回の実験は、果樹であるミカンについても効果があるのかを確かめるものです。

今回ミカン園で行った実験は、ミカンの木から葉を刈り取り、それを通気性の良い袋に入れて吊るすというものです。刈り取られた葉が放出匂いに周囲のミカンの木が反応して、害虫への防御反応を起こし、害虫の発生を抑制することが期待されます。

春に、刈り取ったミカンの葉をミカンの木に吊りました。夏と秋の病害虫調査で、吊るした木と吊るさなかった木で差が出るかを確認します。夏調査の段階では、明確な差は見られていません。秋にも調査を行う予定です。

(あおきようすけ・京大理学修士1回)

なかたたかし

仲田尚志さんインタビュー

日高 涉

今年8月上旬にミカン生産者の仲田尚志さんにインタビューしてきました。

仲田尚志さん：味へのこだわりを持ってミカンを作っています。それはやっぱり、お客様の声として、おいしいミカンへの期待を感じるからです。

おいしいミカン作りとして、まず、やっぱり土壌の改善が重要と考えて、酸性土壌を改善するための苦土石灰をまいたり、除草剤をまかなくて済むようにナギナタガヤという下草を植えたり、それから、腐葉土と米ぬかとを混合して発酵させたものをまいたりしています。

加えて、ミカンの樹の剪定方法を工夫していく、切り上げ剪定を行っています。樹には上に伸びようとする本能があるから、枝を無理に切らずに自然に伸ばす方法です。味と隔年結果に効果があればと思っているんだけど、樹が元気になったような気がしています。

ミカン園全体では、食べるとすっぱいミカンとおいしいミカンとが混在して、おいしいミカンの割合をできるだけ多くできたらと思っています。

(ひだかわたる・京大農学修士2回)

仲田芳樹さんの紹介

大池 智士

今をさかのぼること40年。現在の和歌山県海南市下津町にある山のてっぺんに、とあるミカン園が切り拓かれました。以来、その園で農薬の使用を可能なかぎり省き、ミカンの栽培を営み続けてきた人物がいます。「省農薬ミカン」の生みの親、仲田芳樹（なかた よしき）さんです。

1967年の夏、ミカン農家である芳樹さんの甥（当時17歳）が農薬中毒で落命するという悲劇が起こりました。甥の親として実兄夫妻は、苦惱の末に農薬会社と国を相手取った訴訟を決意します。遺族がどうしても問わねばならなかつたのは、十分な防備をしていても人が死ぬような農薬がつくられ、農民への警告もないがしろとなつたまま、それが安全だと宣伝されて売られているという体制でした。裁判が和解を迎えるまでの17年間には、数々の荒波も経験しました。その一つが次のような批判を受けたことでした。「農薬の害を訴えている原告が、いまも農薬をたっぷり使ってミカンをつくり、それを売っているとはどういうことなのだ」。

こうした状況の下、芳樹さんは新しく拓いた農園で農薬をなるべく使わないミカン栽培の挑戦に踏み切れます。当時は大量生産・大量消費が最高の価値であるという考えが大勢を占めた時代であり、

農薬の使用も最盛期を迎えていました。農薬を減らすことが世間から白眼視されるなかで、実兄と協力しながら農薬を必要最小限に抑えた栽培をしてきました。使わなくてもすむ農薬をどうしても必要な分と峻別し、試行錯誤を重ねてきました。大切に育てた樹木が途中で病虫害により枯死してしまう苦難もありましたが、そのたびに根気強く対策を工夫し、常にぎりぎりの選択を続けてきました。

省農薬ミカン園の可能性を探るなかで同時に見えてきたのは流通の問題でした。農薬を使わないほうが安全なはずなのに、市場では見た目であるいは落とされるため、生産者は農薬を使わざるを得ない……こうした矛盾に対し、省農薬ミカン園の経営という実践でもって、理解ある消費者の協力を得ながら一つの打開策を示してきました。その名のとおり温和でありながら「芳」しい香りを漂わせるミカンの「樹」のような芳樹さんの生き様から、私たち京大農薬ゼミが学ばされたものは計り知れません。現在は、気さくで研究熱心な長男の尚志（たかし）さんが芳樹さんのバトンを引き継いでおられます。

甥の死をきっかけに、人生をかけて省農薬ミカンを育ててこられた芳樹さん。2013年8月23日未明、心不全により、84年の生涯を閉じられました。その足跡にこの上ない敬意と感謝の念をこめて、ここにご冥福をお祈り申し上げます。

（おおいけさとし・京大農学修士2回）

省農薬ミカン園のきっかけ となつた農薬裁判とは

石田 紀郎

省農薬ミカン園は一人の高校生の農薬中毒死から始まった。1967年7月14日に両親とニッソールという殺虫剤をミカン園で散布していた松本悟さんが中毒症状を呈して海南市民病院に緊急入院し、2日後に亡くなった。当時考えられるもつとも完全な服装（帽子、防水着やマスクなど）で両親（松本武さんと悦子さん）と農薬散布をしていた後のことである。両親は、なぜ息子は死ななければならなかったのかを問い合わせ始め、会社や農林省などに質問するも満足な回答をえられなかつた。そこで両親が原告となって、この農薬を製造した会社（日本曹達株式会社）と登録を認めた農林省を相手に民事訴訟を始めた。これが農薬裁判とかニッソール裁判とも呼ばれた訴訟で、1969年5月に和歌山地方裁判所で始まった。農民が農薬を問題とする我が国で最初の訴訟であり、多くの人々から注目された。和歌山地裁では完全な敗訴となり、両親の訴えを裁判所はまったく採用せずに、大雑把に言えば、「農民は金儲けのためにこの農薬を散布したのだから、中毒死の責任は両親にある」というものであった。両親は控訴し、1986年まで大阪高等裁判所で裁判を続けた結果、裁判所の助言も

あり、会社と和解して裁判は終結した。16年間に亘る裁判をこれ以上続けることは原告である両親にとって苛酷であった。国とは和解できなかつたとはいえ、製造会社と和解し、和解金も支払われたのは画期的な勝利であると言える。

裁判で何が争われたかを簡単に言えば、会社と国はニッソールという農薬の安全性のチェックをきっちりと試験したのか、その結果に基づいて農民に安全使用の警告をきっちりやつたのかということである。ニッソールが開発されるまで、ミカン栽培ではフッソールが使われていたが、会社の宣伝では、ニッソールはフッソールに較べて100倍安全であると言われていた。しかし、マウスとラットでの試験では確かに低毒性であったが、モルモットでは両者の毒性には差がなかつた。このような試験結果が明らかにし、会社の警告義務違反を追及した。国の審査も杜撰であったが、農薬登録のデーターが公開されないためにその責任を十分に明らかにできなかつた。

16年間の裁判は松本夫妻にとっても、実弟の仲田夫妻にとってもきびしい年月であつただろう。最初の頃は、伯母の松本員枝さん（婦人民主クラブ）など3人だけの傍聴しかなかつたが、少しずつ村人の理解と支持が広がつていき、和歌山地裁の判決日には数十人の村人が傍聴席を埋めるほどとなつた。このニッソール裁判の意義は、農薬を使つている農民が

農薬の持つ危険性を農薬全盛時代に問題提起したことにある。その後、農薬にたいする判断は社会の中で大きく変わって行つた。この裁判は歴史に残るものであり、原告夫妻を支えた仲田夫妻の存在の大きさは側から眺めていただけの私にもよく分かり、16年間の闘いの後に和解が勝ち取るまで持ち堪えられたのだと思う。
(いしだのりお・市民環境研究所代表)

仲田芳樹さんの 志を引き継ごう

可知 祐一郎

勇気と情熱を持って、省農薬ミカン園を始められた仲田芳樹さんの行動に敬意を表するとともに、心よりご冥福をお祈りいたします。

とても気さくで温厚な方。仲田さんに最初にお会いした時の印象です。しかし、国と企業を相手取つて裁判を闘い、自ら省農薬ミカン園を始める情熱、芯の強さを秘めている方でした。1974年に、新たにミカン園を開くにあたり、農薬裁判の原告が農薬を多く使ってミカンづくりをしているのは矛盾するとの思いもあり、新しいミカン園は農薬を可能な限り省いて栽培してみようと考えたようです。最初は無農薬を目指したいと考えてみえたが、「無」にこだわることなくミカ

ン園を始められました。

学生時代、「農学栄えて農業滅ぶ」という言葉を何度か耳にし、私は、農学部の教育研究が農業の現場から乖離していることに疑問を持ち、何か自分にできることはないかと考えていました。そんな頃、有志で農薬ゼミを立ち上げ、仲田さんの省農薬ミカン園に関わることになりました。農薬ゼミには、農薬、病害虫、畜産、雑草、農業経済、食品、土壤など多方面の専門分野の研究者が参加していました。

しかし、ミカン栽培に関しては、素人集団であり、年3回、省農薬ミカン園に通い、仲田さんから病害虫の識別や剪定などミカン栽培のイロハを指導してもらいながら調査を続けました。仲田さんのおかげで、省農薬ミカン園というフィールドを持つことができ、常に自分の研究と農業の現場の関わりを考えることができたこと、本当に感謝しています。

私は、現在、愛知県で農政に携わっていますが、いつも頭にあるのは、農家の思いを消費者に理解してもらい、農業の応援団になっていただきたいということです。この思いの出発点になったのが、仲田さんとの出会い、省農薬ミカン園の調査であったと思うのです。仲田さんは私の人生の師とも言うべき方でした。

省農薬の取組には、生産した農産物を消費者が買える仕組みが必須です。私は、毎年、省農薬ミカンを楽しみにしています。皆さんも同じ気持ちだと思い

ます。楽しみに購入してくださる消費者があつてこそ、仲田さんが情熱をかけて始められた省農薬ミカン園の未来があると確信します。農家の思いを理解し、応援してくれる消費者の輪がもっともっと広がることを願ってやみません。

(かちゅういちろう・OB・在籍1978~
1982)



収穫作業中の芳樹さん

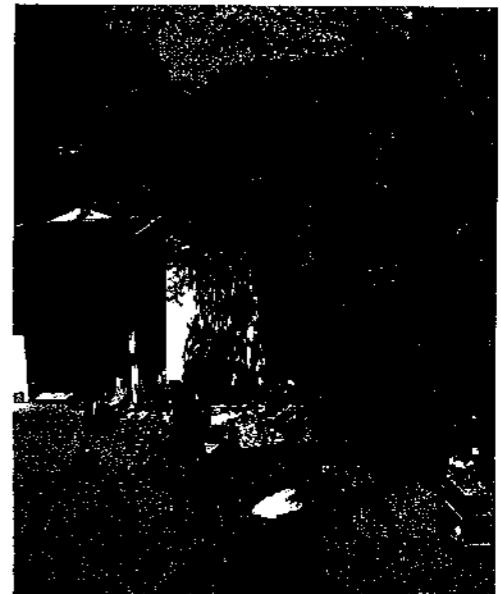
ミカン園に通いつめていた頃： 仲田さんとの思い出

市岡 孝朗

私が仲田さんと初めてお会いしたのは、1986年の春、「悟の家」の開所式の時だったと思う。卒業論文の課題として、ウンシュウミカンを寄主植物とするカイガラムシ類の個体群・群集生態を研究することになり、その調査地として、松本・仲田ミカン園を使わせていただくことになった。

開所式の後、私の卒業論文研究が本格的に始まり、毎週のようにミカン園を訪れるようになった。はじめの頃は、京都から加茂郷の駅まで電車でいき、松本さん・仲田さんの軽トラで送り迎えをしてもらった。行き帰りの車の中で、ミカン栽培や経営のこと、悟さんの事故・裁判のこと、戦前から現在に至るまでの大窪や下津町のこと、減反（当時はミカンの減反が本格的に始まっていた）やオレンジ輸入自由化のこと、地元の野球や相撲（栃乃和歌）のこと、ミカンの他に作っているキュウリ・スイカ・ナス・キウイ・シイタケ・クリ・自然薯・ビワ（たくさん食べさせてもらった）のこと、カイガラムシを含めた各種の病害虫のこと、いろんな話をもらつた。

修士・博士課程へと進んだ後も、ミカン園通いは続いた。その頃には車での送



悟の家：裁判の和解金で建てられた。
調査の際の宿泊に利用している。

迎はなくなつたが、ミカン園の隣で飼われていた牛の世話にやってくる仲田さんの一服におつきあいして、とめどもない話をするのが日課になつていて。24時間中、顔を合わせる人は仲田さんだけという日も少なくなく、1日1回か2回の雑談が貴重な憩いの時だった。1986年以降1990年頃までの約5年間、1年の3分の1ほどをそんな感じで過ごしていた。

研究は順調に進んだ。昆虫生態を研究したい私としては、カイガラムシは多ければ多いほどありがたい。正直に言えば、ミカンの収穫量よりもカイガラムシの生存の方が私にとっては重要である。1987年に寄生蜂を導入したときも、防除がうまくいくことを願わないわけではないの

だが、どのように寄生蜂が増殖し、どのように効果があらわれ、その後、どのように密度が安定するのかといったこの方に関心がある。そのために多少ミカンの木が駄目になってもよい。よいミカンよりも、よいデータなのだという、ミカン生産という観点からは危険きわまりない発想で研究を進めた。実験材料に使うため、天敵の働きを人為的に排除して、いくつかのミカンの樹でカイガラムシを大増殖させたことも何度もある。場合によつては、何本か木を枯らしてしまったことでもあった。仲田さんは、そんな状況をまったく恐れることも不満をもらされることもなく、逆に、面白そうに、にこやかに私の作業を眺めておられた。私の勝手な思い込みかもしれない。でも、そういう仲田さんの遊び心が、松本・仲田ミカン園を支えていたのだと思う。そんな仲田さんのおかげで、私は研究者として駆け出しができた。

大学に職を得てから始めた熱帯での仕事がますます忙しくなり、農薬ゼミからの案内をもらうたび、次は何とか時間をつぶつて調査に参加しようと思いつつ、ここ数年はすっかり和歌山から足が遠のいていた。もう仲田さんとミカン園と一緒に雑談ができなくなってしまったのかと思うと、とても寂しい。無理をしてでもミカン園に行って昔話をしておけばよかったと後悔でいっぱいだ。

(いちおかたかお・OB・在籍 1986~1993)

剪定の思い出

中川 ユリ子

大きな口で、ちょっとだみ声で大笑いする仲田さん(芳樹さん)の笑顔を、今、思い出している。

私が、悟の家に行かなくなつて、もう10年以上の歳月が流れた。それでも、何かの折に、思い出の映像が浮かんでは消える。急斜面の園で木の手入れをする仲田さんの後ろ姿、悟の家の前で焼き芋を焼いてくださっている風景、昔の博労の話をするとときの穏やかな顔。といえば、山芋掘りや、タケノコ掘りも教えてくださった。そして、思い出すのは、眩しい晴天の夏空。

あの頃は、年に何回も時間を作つてはみかん園を訪れ、調査に加わって木々を見つめた。途中から、収穫の楽しみも味わうことができるようになった。仲田さんは、私たちが虫や病気の調査をしている間に、一人でせっせと自分の作業を進め、時々私たちのそばに来ては、誰かを冷やかして、笑いをおこし、そして、また自分の持ち場に戻つていった。たつた一人、広いみかん園で黙々と作業をする仲田さんを見て、何と農業とは孤独な作業なんだろうと思った。

仲田さんにみかんの木の剪定の仕方を

教えていただいたことがある。葉が繁つたときに、上からの太陽の光がどの葉っぱにも一様に降り注ぐように、重なる枝を切つてゆく。寒い冬に、風にさらされながらの実習だった。私も何本か挑戦した。みんな、自信がないので、あまりたくない枝をほんのちょっと切る。すると、その後、仲田さんは、その木をほんの少し後に下がつて觀察し、次には、結構太い枝までもバッサバッサと切つてしまふ。こんなに切るのかと驚いた。できあがつた木の立ち姿は、風通しがよく、確かに枝振りが美しい。熟練には「何年もかからあ」と笑つておられたが、私が何年やってもできないに違いない。仲田さんが作業をするときの、あの、木々を見つめる自信ありげな凜々しい顔を、もう見ることができない。

日本で農業がさかんだったころの、大窪の山や園を知り尽くした“みかん博士”が、今はもうこの世にいないのかと思うと、限りなく寂しい。

(なかがわゆりこ・OG・在籍 1995年頃)

原点に仲田芳樹さんあり

森田 亜貴(旧姓 樅野)

主婦として家庭の台所を預かつて17年になりますが、ここ数年、某生協で、

生産者や食品加工メーカーと組合員との学習交流会などを企画する活動をしています。その活動の根底にある「生産者の顔が見えるのは大切なこと」という価値観の原点をたどると、たき火を囲んで語っていた仲田さんにたどり着きます。

私が初めてミカン山を訪れたのは、大学に入学して間もない平成元年5月。ミカン栽培のことはおろか、農業というものを全く知らずに入学した私は、仲田さんと面と向かつても何を話題にしたら良いのかわからず、夜、たき火を囲みながらも、仲田さんとゼミメンバーの話を横で聞いているばかりでした。

その後、7年余りの間にミカン山を何度も訪問ましたが、他の人が仲田さんと話しているのを聞くスタイルはずっと変わらず、仲田さんとあいさつ以上の言葉を交わすことをしなかったのは今でも悔やまれます。

それでも、仲田さんの生の声を聞いているうちに、「省農薬」などという言葉はただのレッテルであつて、その作物が育った環境や農家の思いを語り尽くすものではないということをひしひしと感じようになりました。

仲田さん、大切なことを教えていただき、本当にありがとうございました。心よりご冥福をお祈りいたします。†

(もりたあき・OG・在籍 1989~1996年)

笑顔

太田 健

「陽気なやっちゃんのう！」
そういうって背中を叩かれていたことが昨日のことのように思い出されます。あの時の笑顔は今でも忘れません。

私が仲田さんのもとに通っていた5年前までの4年間、同じくみかん山に来ていたメンバーには、夜な夜な歌ってみたり、オモチャになりそうなものを見つけてはふざけあう、そんなメンバーが何人かいきました。そんな私たちのことを見つけては、怒るでもなく、時に見守り、時に参加していただいて、一緒に楽しい時間を過ごしました。

4年間でずいぶんと多くのお話を伺いました。みかんのこと、農薬のこと、農業のこと。こんなにもポリシーをもって農業に取り組まれている農家の方がいるんだと感銘を受け、それからの私の人生も大きく影響を受けました。現在、自然食品の業界に身を置いて、パワフルな生産者と交流をもちつづけようとしているのも、その一つです。

卒業後、東京という離れた場所で働いていますが、みかん山で学び、ふざけあった仲間とは東京でも集合し、その後も

付き合いが続いている。これも仲田さんがくれたつながりでしょう。

9年経った私をみて仲田さんは何とお声がけいただけるでしょうか。成長したと言っていただけのでしょうか。「陽気なやっちゃんのう！」と言う声がもう聞けないと思うととても残念ですが、仲田さんは私の中にはまだ生きています。心から尊敬いたします。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(おおたけん・OB・在籍2005~2008年)

芳樹さんの姿

岩本 啓己

省農薬ミカン園に3年しか通っていない私にとって、芳樹さんはまさに生き証人。ゼミのメンバー一同、毎回芳樹さんからどんなお話を聞けるか、楽しみにしておりました。

昨年の夏に伺った際には、猛暑の中でも作業をしておられました。「悟の家」近くの竹やぶから物干し竿にするべく竹を切り出したときなど、足を滑らせそうな斜面もまったく問題にせず歩いておられました。思えば、省農薬ミカン園の斜面を長年歩き回っていたわけですから、身体の軸や足腰が自然と鍛えられていたのでしょう。それからわずか1年後に亡く

なってしまうとは、まさに青天の霹靂でした。最近はミカン山で会う機会が減ったな、大丈夫かな、と思っていた矢先のことでした。

芳樹さんはこちらが何か質問すると、本当に熱っぽく語ってくれました。天候とミカンの味や病害虫の関係、下津のミカン産地の歴史・・・剪定時の枝の切り方は何度聞いても素人の私にはついに分かりませんでしたが、自分の仕事に対する意地や誇りなしでは、あはなれないと思います。しかし、豪快な笑顔の裏に、想像を絶する試行錯誤があったはずです。

今まで誰もやったことのないことに、じっくりと挑む・・・身体だけでなく、心の軸も強い方だったのだと思います。

農薬問題に自らの実践をもって大きな一石を投じた芳樹さんは、ひとりの農家のおじさんとしても魅力的な方でした。芳樹さんがやってきたことを引き継ぎ、また、語り継いでいきたいと思っています。

(いわもとひろき・京大農学修士2回)



昨年の収穫時の集合写真。前列に芳樹さん

別れ

和泉賀津子

8月23日のお昼前、突然の知らせがきた。「仲田さんが亡くなつた」と。

すぐにはその事実が信じられず、かなり混乱してしまつたが、ゼミのメンバーと共に、お通夜と告別式に行くことになつた。思えば、2000年の1月に松本武さん（農薬中毒で亡くなつた悟くんのお父さん）が亡くなられてから、10年以上が経つてゐた。

翌日、石田さんとゼミメンバーの日高くんと岩本くん、私の4人で、和歌山へ向かつた。ここ最近は、みかん山でも仲田さんにお会いすることはなかつたが、特に病気をされているとも聞いていなかつた。

お通夜でお会いした息子の尚志さんによると、前日の夜中にトイレに立たれ、その時に奥さんが声をかけられたそうだが、また床について、朝起きてみたらすでに冷たくなつておられたとのことだつた。

ここ最近は、足が弱つて、山に来ても長時間は作業されなくなつてゐたが、普通に生活を送つておられ、本当に誰の手を煩わせることなく、人生の幕を閉じられた。

8月10日が誕生日で、84歳になられた直後のことだつた。

数年前、尚志さんが後を継いでくれると決まつた頃から、仲田さんは安心されたのか、急に歳をとられたように思えた。腰が曲がり、小さくなられたように感じていた。

思い返してみると、ゼミのメンバーが最後に仲田さんにお会いしたのは、昨年の収穫の時だったことに気がついた。夏調査の時に会つておくべきだと悔やまれた。

さらにもつと悔やまるるのは、数年前から石田さんが「仲田さんが元気なうちに、みかん山に来たことがある人に声をかけて、みかん山での同窓会をやろう。1週間くらいずっと誰かが山にいて、その間いつでも誰でも来てもらって、みかん山で過ごしてもらおう」と言つてゐたのに、それが実現しないうちに逝つてしまわれるなんて、考えもしなかつた。本当に悔やまる。

仲田さんには、本当にいろんなことを教えていただいた。仲田さんが若い頃は、バケツ1杯のみかんで、一晩遊べたくらいの値がついたこと、その後流通がどんな風に変化していったか、和歌山のみかん収穫は片手取りをすること、夏の摘果はなかなか思いきつて出来ないことなど、どれも私にとっては、新鮮な知識だつた。

しかしながら、プロの技と私が思ったのは、冬～春にかけて行う剪定だった。みかんの樹が来年再来年どんな形になるかを予想し、どの枝を落として樹の形を作っていくかを瞬時に判断し、切っていく。何度も聞いても、どんなに詳しく説明してもらつても、難しくて分からなかつた。これこそプロの技と、いつも思つてゐた。

しかしそのプロの技ももう見ることはないと、本当に寂しい。

お通夜には、農薬ゼミOBの山内くん、内海くん、山崎さん、西原くん、福井くんなども駆けつけてくれた。告別式には、エルコーブの方や、エルコーブこども会の藤原久美さんらも参列された。

久しぶりに、松本武さんの奥さんのエツ子さんにお会いできた。以前よくみかん山へ来てくださつた中筋さんや土田さんにも久しぶりにお会いした。また、尚志さんのご家族にも初めてお会いした。

皮肉なことだが、故人は懐かしい人たちとの再会の場を作ってくれる。

1年に5回くらいしか行かないゼミメンバーに対して、仲田さんはその都度優しい笑顔で迎えてくださつた。初めてみかん山に来る学生にも、いつも変わらず丁寧にみかんの木の説明をしてくださつた。朝、薪で火をおこしている所へ、軽四で「おはよう」と来てくださつた仲田

さんの姿が思い浮かぶ。素朴で素敵の方だった。

石田さんが、「仲田さんは、人生の半分を私たち農薬ゼミとかかわって、おもしろい人生だったと思ってくれてるやろか？ 変なやつらとつき合つてしまつたわって思われてるかな？」と言つてゐたけれど、きっと「おもしろかったよう」と言ってもらえると確信している。

今頃は、松本武さんや井上民二さん（＊）と一緒に、美味しいお酒を酌み交わしながら、省農薬みかんの思い出を語つておられるのではないかという気がする。

仲田さんにみかん山で初めてお会いしてから27年が経つた。「悟の家」の周りの樹々も大きく成長し、夏の日よけがいらぬほどになつた。仲田さん、本当に長い間お世話になりました。ご冥福をお祈りします。

* 京大生態学研究センター教授で、農薬ゼミで一緒に調査を行つていながら、1997年飛行機事故で亡くなられている。

(いづみかつこ・京都市職員)



今年も省農薬ミカンをお買い上げいただき、
ありがとうございました。

①ミカンを長持ちさせるために

箱の中のミカンを一度全部出して、新聞紙の上でころがして、余分な水分を飛ばし、よく乾いたら箱の中に戻して、風通しの良い所で保存してください。また、痛んだミカンがございましたら、見つけ次第取り除いてください。

上記のようにしていただくと痛みにくくなり、条件次第ではあります
が、数週間保存することができます。

②配送ラベルのご確認を！

配送されてきた段ボールに張り付けられている配送ラベルをご確認ください。茶封筒が間に挟まれており、その中に請求書もしくは贈り物状がございます。(大学での受け取り、ゼミ員による配達を希望された場合は、茶封筒の挟み込みがない場合もあります。)

このミカンは食べる人と作る人の安全を念頭に置き、
農薬ができるだけ使わずに栽培されています。

和歌山県海南市下津町において栽培したミカンです。

1967年に起きた農薬中毒事故をきっかけとして、農薬ができるだけ減らした方法(省農薬)で栽培する省農薬ミカンが始まりました。(経緯の詳細は、本文中の仲田芳樹さんの追悼記事をご覧ください。)

農薬ゼミは、省農薬ミカン園をフィールドとして、実際に農薬を減らして栽培したミカン園では害虫や病気がどうなるのかを、栽培に関わりながら実践的に調査・研究を続けてきました。また、省農薬ミカンの販売窓口もしています。

〒606-8827

京都市左京区田中里ノ前町 21 石川ビル 305

電話/FAX 075(711)4860

Email: kgrap@kais.kyoto-u.ac.jp

HP: <http://dice.kais.kyoto-u.ac.jp/KGRAP>

振替口座番号「01070-0-36598」農薬ゼミ